

不況を 生きる

▶ 4 ◀

ファクスがはき出した一枚の紙に、松本市笹賀の精密部品加工、伊藤製作所の専務伊藤秀光さん(39)ら工場にいた五人の顔がこわばった。

昨年十二月十七日。受注済みだったいくつかの部品番号の下に「注文はキャンセルになりました」の文字が見えた。送信者は、同社が売上高の約三割を受注している南信の産業機械メーカーだった。

十社ほどある他の取引先からの注文は、十月に「すとーん」(伊藤さん)と急減。仕事量は夏ごろに比べ七、八割減の状態が続いていた。南信のメーカーの注文は最後に残った定期的な仕事だった。

このメーカーからの受注は、十二月に入って段階的に減少。十二月に入ってから会社を訪ね、仕事量を減らさないよう直談判したばかりだったのに…。五人で切り盛りする町工場は、ファクスが送られた翌日から仕

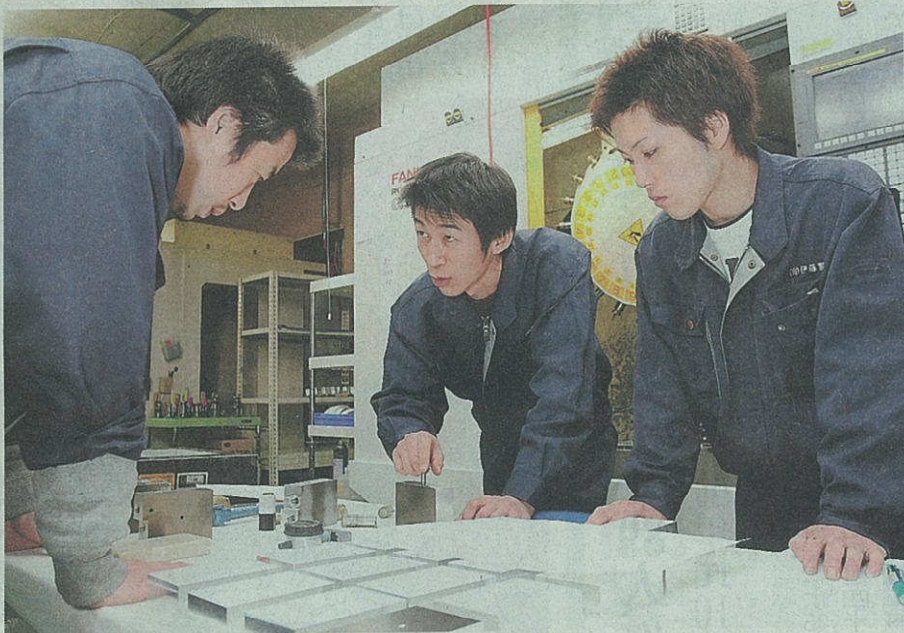
事がなくなった。

伊藤さんは二〇〇三年、松本市内の部品製造会社を辞め、父昭司さん(64)と母由美子さん(60)が一九七〇(昭和四十五年)に創業し、二人だけで営んでいた伊藤製作所へ入った。

「自分を育ててくれた工場を親の代でつげせない」。もの作りが好きだった。五感を生かして部品の形を削り出す楽しさ、期待以上の物を納品した時の顧客の笑顔…。

事業拡大に向け約千三百万円で一ミ以下の精密加工ができる工作機械マシンクセンタを導入。プリンター、自動車、ブルーレイレコーダー、建設機械まで幅広く、素材も金属やプラスチックなどどんな部品加工に

逆境一力合わせる町工場



若い従業員とともに働く伊藤さん(中央)。雇用を守るために必死だ＝松本市笹賀

● 県内の小規模企業 中小企業基本法は、製造業では従業員20人以下を小規模企業と定義。県の2006年事業所・企業統計調査で

は、県内の製造業1万2727事業所のうち、20人未満の企業は1万384事業所で約82%を占める。東京商工リサーチ長野支店によると、08

年の県内企業の倒産(負債総額1000万円以上、うち整理含む)は189件で、このうち従業員20人未満の企業は167件で約88%に上った。

も対応した。

ここ数年の景気にも後押しされ、態勢や生産設備などをファクスやメールで売り込むだけで、新しい仕事が取れた。工場に働く従業員は伊藤さんを含めて四人が増え、マシンクセンタも四台に。女性事務員も一人雇った。「徹夜や休日出勤は当たり前」。売上高は右肩上がりだった。

そんな日々は一変した。十二月下旬に一件、新たな仕事を得たが、工場を稼働できない日が四日もあった。「どう乗り切りたいのか」。会社の今後を考えると夜も眠れず、片頭痛にも襲われる。

ただ、人員削減は考えない。従業員は全員二十代。仕事だけでなく、休憩中や仕事後にも濃い人間関係を築いてきた。家族構成から生立ち、プライベ

トの悩みまで知っている。伊藤さんが〇七年二月に体調を崩して四週間仕事を休んだ時には、協力して会社を守ってくれた。

不況下で人員整理を加速させる大手企業やその経営者の姿を見ると、「寂しくなる」。逆境にある時こそ強く思う。「従業員は同じ釜の飯を食う仲間、家族。それをどうして放り出せますか」

昨年十二月二十九日の仕事納め。従業員に業績悪化を率直に伝えながら、伊藤さんは前向きな言葉も連ねた。「嵐はいつか去る」「みんな力で合わせて切り抜けよう」「ピンチはチャンス」。

気持ちだけで乗り切れるほど甘い時代ではないことは承知している。本音を言えば「何をすればいいか、分からない」。それでも「いつか来る春に向け、仲間とがむしゃらに前へ進むしかない」。

六日は仕事始め。今年はず、作業着をスーツに着替え、商品サンプルを持って飛び込み営業を始めるつもりだ。「従業員の生活を保障するのも自分の責任」。そう言い聞かせながら。

従業員は家族 放り出せない